

漂着朝鮮人と鳥取の人びと

文政二年（1819）年正月11日、松ヶ谷沖を漂流している異国船が発見されました。この船には、安義基船長ら12名の朝鮮人たちが乗船していました。安船長らは八橋から鳥取に移された後、城下の町会所に滞在しますが、岡金右衛門ら鳥取藩の役人に伴われて長崎へ送られます。そして、朝鮮と江戸幕府との取り極めに従って、長崎から対馬を経て朝鮮へと帰ってこきました。

「漂流朝鮮人之図」は、漂着民たちが町会所に滞在していたときに、小田蛙村によって描かれたといわれています。また、安船長の謝恩状は長崎まで同行した岡金右衛門に宛てられたもので、別れるにあたって感謝の気持ちを述べたものと考えられています。

日本語訳

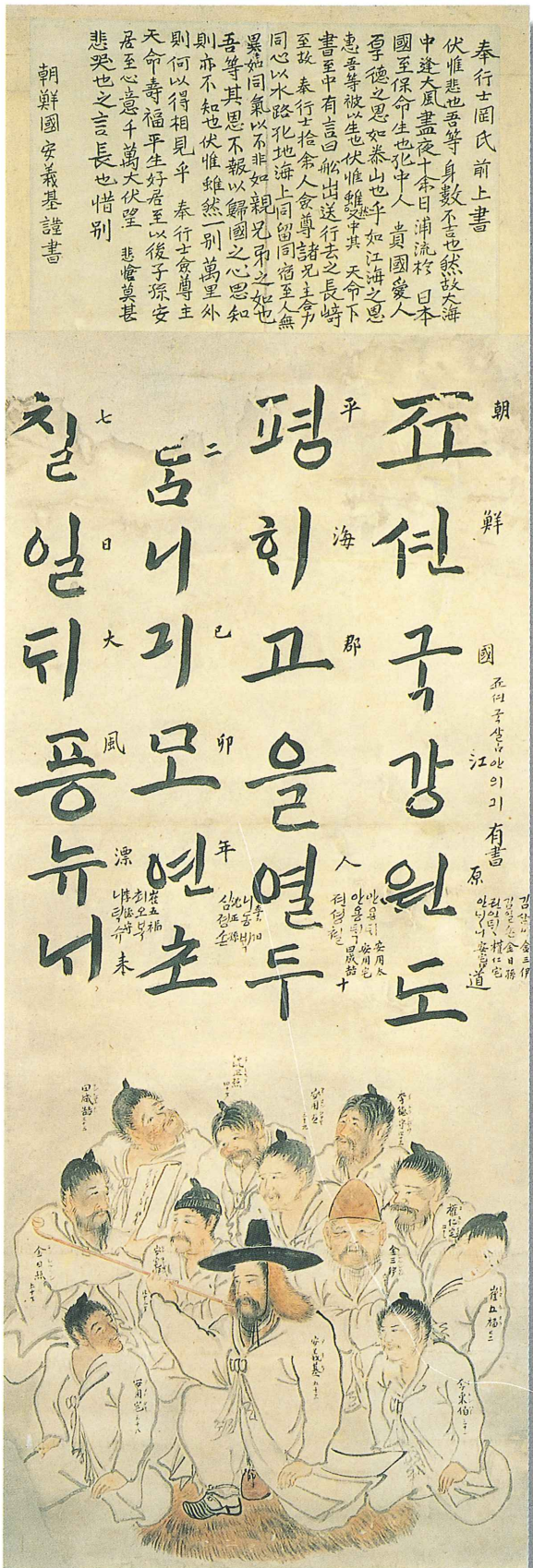
奉行岡氏の前に書き上げる

よくよく考えて見ますと、私たちは運命は不吉であったのでしょうか。大海中で大風に遭い、昼夜十余日も漂流することになりました。日本国に流れ着いて、死ぬべき命でありましたが、助かることができました。貴国の方々が私たちを保護してくだされ、まるで泰山のような高い御恩、江海のような深い御恵のおかげで生きることができました。

しかしながら、幕府からの命令書の中に、船を出して長崎まで送れとあったとのこと、そんな訳で岡奉行士様外十数名の皆様が力を合わせて長崎までの水路・死地・海上の道を、一緒に生活を送りながら、全くわけへだてなく、親兄弟のように御世話をしていただきました。私たちはその御恩に報いることもなく帰国いたします。申し訳ございません。ひとたびお別れをして万里境を隔ててしまいますと、二度と御目にかかることはできませんでしょう。

奉行岡様をはじめ皆様の御健勝と御子孫の御繁栄を祈念いたします。万感胸にせまり意を尽くしません。これをもつて惜別のことばといたします。

朝鮮国 安義基 謹しんで書す



「漂流朝鮮人之図」文政二年（県立図書館）